

東アジアの知識人に見る国家理念と伝統

銭 国 紅

(発言メモ)

一般的に言うと、東アジアは、中国、日本、朝鮮半島を指す場合が多い。最近北朝鮮から日本に里帰りした拉致被害者の子供たちのことが大々的に報道されたためか、私の周りの女子大生も北朝鮮だけではなく東アジア全体について少しずつ関心を持ち始めているようである。アジアとはどんなところだろう、東アジアと日本との共通性は何なのか、アジアの人々は日本のことをどう見ているのだろう……等、教室で次々に出た質問は、その関心の高さを窺わせるものであった。

アジアとは何かという問題は、日本にとっては古くて新しい問題である。過去十年来、日本の学界はアジアを巡っていろいろと議論を重ねてきた。その関心は今漸く一般社会に現れ始め、若い学生にまで及んできたのかもしれない。

学生の質問に対して私は言葉を選びながら次のように答えてみた。

日本人のアジア像の変遷史を辿るまでもなく、アジアという概念は近代以来日本人の脳裏にこびりついて離れないものとさえ言えよう。明治～昭和期の日本におけるアジア意識は、アジア進出とアジア侵略の意図に導かれる面が強く、戦後はアメリカ流の民主国家建設に専念したため、アジアへの関心は薄くなったが、バブル崩壊やアジア経済の急速な発展によって、こうした事態に大きな変化が訪れた。今日では、日本政府や経済界はEU型の東アジア経済共同体を模索する動きさえ見せており、若い人までアジアのことに関心を抱き始め、韓国映画がテレビの視聴率を高めるような世の中となった。こうした現象は戦前の一方通交的なアジア観、戦後暫くのアジア不在観が、今日ではアジアを再発見しようとする新しい動きに変質しようとしていることを示していると言えよう。

アジアという言葉の出現は明朝末のイタリア人宣教師マテオ・リッチが明朝の中国に持ち込んだ世界地図に、「亜細亜」という漢字で表記されたのが最初であった。五大洲の一つとしてアジアを位置づけた画期的な出来事と言えよう。この世界像の将来は、その後の中国のみならず、漢字文化圏に属するベトナム・朝鮮・日本にも大きな影響を与えることになる。特に中国を中心とする朝貢体制下に置かれた東アジア諸国は、これによって中国を相対化し、自国を世界の中において見直す思考方向が初めて可能になった。「アジア」という表現は、こういう意味において最初から、中国に対する周辺国の独自性を自覚させるのであり、この概念の定着は、中華文明を軸にした東アジアの分化と距離感を生み出す契機となった上に、西洋や非西洋を入れた新しい世界像の形成に大きく寄与したのであった。

近代化の過程において、日本を先導とする東アジアの国々は、次々に古いアジアを脱却することを余儀なくされたが、これらの国が西洋化ないし近代化の道を邁進しえたのは、長い間アジアを相対化して眺める意識を培っていたからであろう。中国をも含めて、東アジアの国々にとっては古いアジアとの訣別こそがそのまま新しいアジアの建設に向かう避けて通れない道であった。

しかし東アジアの近代化の完成や深化に伴って、今日、新しい東アジアの国々は、再びお互いを再発見する時代に入った。多くの人々の「アジア」概念を問う意識の裏にはこうした確固とした事実が存在する。東アジアの国々がお互いを再認識しようとする声は、要するに二十一世紀世界の枠組みを再構成する壮大なドラマの前奏曲なのである。

東アジアには近代化のために互いに離反しあう政治的な力学が働いた過去があった。しかしアジアに共通する新しいドラマを再構成する力学が同時に働くことも可能である。その最大の理由は、やはり東アジア各国に共通する文明的な伝統にある。孔子の知恵、老子の思惟、朱子・王陽明の学説、仏教、漢字・漢学という文明的な伝統や価値観が、東アジア各国の個別文明の血肉となっているし、米や箸を中心とした食生活、正月の過ごし方、端午の節句などの祭りや民俗にも共通な部分が多いのは明らかな事実である。

こうして東アジア諸国の間には、様々な相違とともに共通点もある。それらを弁別し、互いを探し求める旅に上れば、東アジアの大地のあちこちに多くの古き良き伝統が蘇ってくるであろう。こうした個々の文化の伝統や価値観を一つの大きな流れに束ねることができれば、現在の世界に多種多様な文化を持ち込むことが可能になるばかりでなく、二十一世紀の東アジア地域の更なる発展や飛躍もまた期して待つべきである。

要するにこうした東アジアの各国の国家理念の形成と伝統意識との関係についての学問的な把握は、新しい東アジアを構築するためのもっとも基礎作業の一つとして位置づけられよう。

日中近代化の本質を他者発見という世界像の形成と自己発見という自我の確立という二つの角度から観察すると、世界像の形成と自我像の確立があい繋がるもので、他者発見と自己発見のなかで、近代化が達成されていくことが分かる。したがって日中近代化の特徴と本質的相違を説明するために、世界発見のいきさつへの解明は勿論、世界発見を通じていかに自己発見を遂げたか、さらにこうした世界発見と自己発見の相関関係のなかで、近代的思惟がいかに確立されたかも大きな課題になってくる。日中両国の啓蒙思想家にみる近代的な国家理念の成立と伝統との関係を明らかにするのは、両国の近代化の実像の究明と両国の近代化の世界的意味への解明に一層寄与できることが明らかである。

日本の近代国家理念と伝統についての分析には、代表的には伝統思想と近代思想の連続と断絶という視点と伝統から近代への転換という視角がある。前者は丸山真男の『日本政治思想史研究』によって解説され、後者は松本三之介『明治思想における伝統と近代』によって主に解説されている。

中国の近代思想の形成の分析には、代表的に西洋の刺激を受けた拳句、革命によって近代思想が確立された「革命説」（外因説）と明清以来の中国の内部思想の変化の結果によって近代思想が形成された「内因説」がある。前者は日中の多くの思想史家によって述べられた一般的な見方で、後者は少数ながら最近一部の日本の中国思想史家（溝口雄三）に提起されたものである。

上述のような研究を踏まえながら、異なる角度から更なる分析が可能かどうかを試みてもいい。こうして日中近代啓蒙思想家に見る国家理念と伝統意識を比較し分析することによって、日中近代化における近代的国家理念の生成と転換の実像を明らかにし、両国近代化の特徴と意味を更に広く深く捉えることができるだろうと信じる。